



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	ソロモン裁判と大岡政談
Author(s)	木村 毅
<i>Citation</i>	文林（BUNRIN），No.8：1-22
Issue Date	1974
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# ソロモン裁判と大岡政談

木村 毅

## 一 福沢輸入の英語読本

大岡政談の話の中に、ソロモン裁判の話がまぎれこんでいるという知識を私にあたえてくれたのは内田暮庵である。「日本文学に及ぼした西洋文学の影響」という一文にあるので「日本文学講座」（新潮社刊行）に現れた。

そうと聞くと、これは、実母と継母が子供をあらそう話だなとは、すぐ合点がゆく。これは大岡政談でも最も流布した話で、私たちは小学校の時から聞いて知っていた。先生からは習わなかったけれど上級生が話してきかしてくれた。

この原話のソロモン裁判も、じつは明治の早くから日本中に知れ渡っていた。それは福沢諭吉が慶応二年に二度目のアメリカ渡航をした時、おびただしい洋書を教科書として購入してきた。それは身分不相応の買物として、一年ばかり幕府のため、横浜の運上所で差し押えられたが、明治維新とともに解除されて慶応義塾の教室で用いられ、それから全国にひろがった。政府はまさきに時勢の急要求に即応するものとして英語学校を、東京、名古屋、大阪、広島、長崎、新潟につくり、どんな教科書もちいていいかわからないので、みな慶応義塾にならった。国立学校からしてそうなのだから、それから全国にできた小・中学校から村塾にいたるまで、福沢輸入本をもちいたので、その初歩読本として最も有名なものが Marcus Wilson の “The Reader” であり一般にはウィルソン・リーダーと呼ばれた。

これは Barnes の “The New National Reader” が取って代るまで、すなわち維新から明治二十年ごろまで、最も多く日本全国に使用されたから、これを読んだ者は何千、あるいは何万できかぬであらう。坪内逍遙や三宅雪嶺が名古屋でまなんだ教科書の中にも、ウイルソン読本が交っていたことは、二人の回顧談から明かである。そのウイルソン読本の三の巻に “Solomon, the Wise King” という章がある。

それを全章訳出しておこう。ソロモンの輪郭を心得てもらっておかないと、この篇の理解が不完全、燃焼に終ることを怖れる。

## 二 賢王ソロモン

一、ダビデは多年イスラエルを治め、王の位にある間に『詩篇』を著作した。この中には主に對する彼の多くの祈り、神の善根と慈悲への讃歌がある。老いて彼は子のソロモンに王冠をゆずった。祭司サドクと、賢者ナータンが、ソロモンの頭上に膏をそそぎ『神よ、ソロモンを救い給え』と叫んだ。ダビデはソロモンに命じて『汝、主の道を歩みて、彼に仕えよ、されば汝がなす所すべて榮えん』と云った。

二、ダビデが死んだ後、ソロモンは主に犠牲を捧げるためギベオンに行った。そこで夜、神がソロモンに現われ『汝の我に欲する所を求めよ』という、ソロモンは答えた。『私は子供である。しかも多くの人民の王なので、どうしていいか分らない。されば我に、智慧と知識と、賢明にして理解力ある心とを與えよ。我れ、人間をよく治める道を知らば、汝の心にも協わん』

三、そこで神は彼に云った。『汝は智慧と理解を求めた。しかし汝自身の長命も、富も、汝の敵の破滅も求めなかった

から、見よ、我は汝に他に比類なき智慧を興える。その上に我は、汝の頼まなかったものも汝に興える。富と譽れほまれである。もし汝が我が道をあゆみ、わが律法を守ること、汝の父ダビデの如くなせば、我は又汝に長壽も興えるであらう』そしてソロモンは目ざめた。ところが、それは夢であつた。

四、ソロモンは王座にすわり、人民の申し出る諸訴訟を裁判した。ある日二人の女が、二人の小児をつれて彼の前に現れたのである。ひとりの小児は生きて丈夫であり、他の小児は死んでいた。そして二人とも、生きてゐる小児を自分の兒として云い張る。その一人は云つた。『おお、わが主よ、私はこの女と一つ家に住んでいました。二人ともどもに小さき兒を産みました。しかし夜中にこの女のうんだ兒は死んだのです。死んだ時に彼女はそれを私の所に持ってきて、私の寝ている間に、私の子を盗んでゆきました。朝、私が目ざめて、死兒をみた時、それは私の兒でない事が分りました。』

五、別の女は怒つて叫び出した。『そうではありません。生きてゐるのは我が兒で、死んだのが彼女の兒です』さきの女は云つた。『いや、死兒は汝の兒で、生きたのが我が兒です』ふたりは王の前で云いあらそうので、どちらの話がほんとうなのか分らない。そこでソロモンは云つた。『一人は生きたのを我が兒といい、汝の子は死せりという。一人は又いう、否、汝の兒は死せり、我が兒は生きたる方なりと』そこでソロモンは云つた。『我れに劍をもち來れ』

六、家來は王に劍をさし出したので、王は云つた。『生きた子を眞つ二つに割つて、二人に半分づつ與えよう』と。すると本當の方の母親が叫び出した『おう、どうか子供を殺さないで下さい。この女にそれをやって下さい。』もひとりの女は云つた。『それは二人どちらのものでもなくするため、仰せの如く二つに切り給え』これでソロモンはただちに覺おぼつた。たとえ人の物になつても殺されるよりはましだと思ふ情こそ、ほんとうの母親だと。そして云つた。『こ

の女に生きた児を與えよ。決して殺すな、彼女がああ云うのこそ、まことの母親である』國民はこれを聞くと、この王には神の智慧が宿っているものとして、むしろ怖れた。

七、ソロモンは多年王位におり、神の指図を受けたので、そのため大いなる殿堂を建てた。バイブルの記るす所によると、彼は他の何人よりも賢かったため、どこの国からもその人民が、彼の智慧に教を乞いにきた。

八、バイブルはいう。『彼は三千の箴言をのこした。』箴言とは賢い言葉である。『彼の雅歌は千五百に及ぶ』そして彼の著作は『レバノンの香栢から、壁を割って萌え出るヒソップ（雑草）にまで』及んだ。獸類、禽鳥、這ふ虫、魚についてまで書いた。箴言、傳道の書、雅歌——みな旧約聖書の中にある——がソロモン著作の主要なるものである。(Wilson's The Third Reader, Part I, Lessons XXII, "Solomon, The Wise King.")

### 三 旧約聖書の日本訳

この読本は前述の通り、福沢諭吉が輸入して久しきに渉って全国公私の学塾に用いられたが、ナショナル読本と交替しても、しかしソロモンの話は、國民の知識から消失してはしまわなかった。というのはその原典の「旧約聖書」の邦訳が明治二十年に完成して、少くとも、その後今日まで幾度かの改訳を見ながら、新旧信徒はもろろん、信徒ならずとも文化的常識としてこれを心得ている人は少なからず、それらの人は旧約聖書中でも最も著名なソロモンの話は機智がはたらいいて面白いから、みな記憶に留める。われらは先ず旧約聖書邦訳の文芸的価値を示すため、まだ帝国大学々生でありながら卓越した批評家だった上田敏の批評をあげておけば、読者も同感するであらう。

「和訳旧訳全書、新教の派なる米国聖書会社版ひろく行われて、筆路すこぶる雅健なり。その他ギリシヤ正教の訳あり、又近時旧教の秀拔なる福音書訳出づるに会し、吾等が研究の便を加うると共に、いよいよ聖書の精読を怠るべからざるなり。……わが和訳の聖書中にも詩篇第一六二篇、エホバ、シオンのとらわれ人を返し給ひし時、われらは夢みるものの如くなりきという京もうでの歌、第一三三篇の觀よ、はらから相むつみておるは、いかによくいかに楽しきかな。首にそそがれたる貴き油、鬚にながれ、アロンの鬚にながれというダビデのよめる京もうでの歌、第一三五篇バビロンのほとりの柳の歌、雅歌全部、イザヤ第三四、三五、四〇章の如き、全く国文の素養を怠れる十数年前に於て、よくもかかる雅馴の文をなししかと驚歎せしむ。……明治の大翻訳は疑もなく敬虔の信徒号が刻苦して大成せし舊新約全書なり」(「文藝論集」中の「細心精緻の學風」(明治十九年))

しからは斯く讃歎せられた名文章の旧約聖書で、ウィルソン読本により明治前半期のわが英學書生の間に広く流布したソロモン裁判の話は、どんなに訳出せられていであらうか。引用しておこう

『こゝ娼妓なる二人の女、王のもとに來りてその前に立ちしが、一人の女いゝけるは、わが主よ、我とこの女は一つの家に住む。我この女と共にありて子をうめり。然るにわが産みし後三日めにこの女も又うめり。而して我等ともにありき。家には他人の我らと共におりし者なし。家には只われら二人のみ。然るにこの女その子の上に伏したるによりて、夜の中にその子死にたれば夜中におきて下女の眠れる間に、わが子を我の側よりとりて、これをおのれのふところに伏さしあ、おのれの死にたる子をわがふところに伏さしめたり。朝におよびて我れわが子に乳をのませんとて、起きてみるに死にいたり。われ朝にいたりて、それをよく見たるに、それはわが産めるわが子にはあらざりしと。今一人の女ゆう。いな生けるはわが子死ねるは汝の子なりと。……彼等かく王の前にいえり。……王すなわち劍を我れにもち來れと

いゝければ劍を王の前にもち來れり。王いゝけるは、活ける子を二つに分ちてその半ばをこれに半ばを彼に與えよと。時にその活ける子の母なる女、心その子のために焼くが如くなりて、王に申していゝけるは、乞う我が主よ、活ける子を彼に與え給え、必ず殺し給うなかれと。然れども他の一人はこれを我のにも汝のにもならしめず分たせ給えといえり。王答えていゝけるは、活ける子を彼に與えよ、必ず殺すなかれ、彼はその母なるなりと。」(列王紀略)

#### 四 講談「大岡政談」

次ぎには「大岡政談」からこれに照応する話を拾い出して、比較せねばならない。「実母繼母御詮議の事」と題して次の一文がある。

「或家の主我妻の罪なきを離縁なし、豫て云交せし女を直に後妻に娶れり。然るに離縁せし、前妻懷妊し親里にて女子を産み養育なしけるに、此娘十歳ばかりに成りし處、生れ付纏きりやう致好く發明にて、今は何方へ奉公に出すとも一廉親の爲に成るべき程なりしかば、彼家の後妻其娘を羨しく思ひ、我が方へ引取らんと掛合かひひしより、竟に先妻後妻の争となりて、奉行所へ訴へ出でける。其時大岡越前守殿へ兩方より己が実の子なりと申立て、是と言ふ證據もなければ、先妻後妻互にいよいよ言争ひ果しなきゆゑ、奉行も是をさばき兼ねて見えけるが、大岡殿兩人の女に向はれ、「然様ならば致方なし、其子の中へ入置きて雙方より左右の手を把つて引合ふべし。勝ちし方へ其子を取すべし」とあり。「畏りぬ」と娘を兩人の中へ入れ、双方より娘の手を取り互に力を出し、白洲に於て引合ひければ、中なる娘左右の手の痛に堪兼ね、思はずワット泣出しければ、一人の女はハッと驚き手を放しけるが、引勝ちし女は、「ソリヤこそ我が子に違ひなし」と

申しけるを、越前守殿、「ヤレ侍て女」と聲を掛けられ、「汝こそ偽者なり。誠の母は中なる娘の痛を悲み、思はず引負けて手を放したり。其方は元他人なれば、其子の痛を思はず、只引勝つ事にのみ心を用ひしならん」と睨められしかば、彼の女はハット平伏しける故、「此女は偽者なり」とて、繩を掛け拷問せられしに、終に白状なし、疑も無き先妻の娘なりとて下されける。是天地自然の情を酌れし裁許と云ひつべし。』

大岡政談のこの話は、ソロモン裁判の焼き直しというのが云いすぎなら、少くとも同根、同類系の話であることは、何人も疑うまい。われらは内田魯庵の論考によって、これを知ったのだが、そう明かに書いたのは魯庵だったとしても、同じことを内々で心の中に感じていた人は、他に前から幾人もあったであろう。

但し大岡政談はじつは明治以前に主体は出来ていたのだ。したがって、この実母継母の子争いの話も、江戸時代に知られていたのだから、ウイルソン読本や邦訳旧約聖書から焼き直して来たということはある得ない。そうとすれば一たい、どこから、どうして、いつの頃流れこんで来たものか。これは考察に値する興味多い問題で無くてはならない。

われらが大岡政談について渉獵した書物は多いという事は出来ぬ。良本として一時大いに世に行われた有朋堂文庫の「大岡政談」の緒言では校訂者の塚本哲三が「その内容また史実の典拠とすべからざるや論なし」といい、「本書の原文は専ら写本として世に行われ、絶体の典拠と認むべき原本あるを見ず」といって、その物語の成り立ちについては何号触れるところがない。また笹川臨風博士も、この現代訳を作った解説で「大岡政談なる講談の種本が作られたのは、いつ頃であろうか、もとより何等の證據もなければ口碑すらもない。無論一朝一夕に作られたものではなくして次第に製作されたものであらう」といっているだけである。但し終戦後になって出版された「定本講談名作集」（講談社・昭和四十六年刊行）では別巻の解説研究篇に、



「大体、大岡政談というのは、実際にあった話ではなく『桜陰秘事』『棠陰比事』など支那小説の翻案か、日本に古くからあった裁判事件を越前守にあてはめたもので、中には切支丹の伝道師によってもたらされた西欧の賢者などの焼き直しもある」

と云っているのは、簡単だが、この物語の形成に従前より、一步をすすめたものと云える。しかしその前に、大岡裁判物語の構成発達に、一道の歴史的照明をあてたのは、文学者でも、又その方の専門的研究家でもない尾佐竹猛博士であった。大審院判事が本職の博士は、本来の廣博なる文化的趣味から、講談や文芸に関しても素養がおろそかならず、「大岡越前守について」（昭和十一年「警察講演会速記」）をはじめ、「江戸時代の探偵小説」、「探偵小説私見」その他、幾篇かの有益な論者がある。それによると、日本では江戸時代から社会組織や制度上の制約上で探偵小説は発達せず、その代りに裁判物語の隆盛をみるに到ったといい、その完成の頂点に達した代表的なのが「大岡政談」とし、この構成発展は、こう略説している。

『當時（江戸）の社會は絶対專制時代である。而してその專制力の最も猛烈に、人權も何もかまはずに發動するのが、司法警察の部面であるから、これに付ては是非の批判を許さず、苟も權威を以て民衆を壓服することを以て、官廳の威信を増すものと心得て居つた此時代に於ては裁判の内容を民間に知らすことさへ、恰も威嚴を冒瀆するものと信じられて居つたのであるから、假令小説と雖も、少しでも筆が裁判に觸るゝことを許さなかつたから、此間に於て探偵小説の發達の餘地は無かつたのである。』

そこで已む無くば、支那小説の翻案か、古い時代の主人公を持出さなくてはならぬが、支那だとして御多分に洩れぬ非科學的の頭の國民である。唯だ辛うじて『棠陰秘事』の類があつて探偵小説といふべきである。慶安四年に、既に『棠

『陰秘事』が翻譯されて居るから、時人の好稱も知ることが出来る。そして史上の人物として有名なのは青砥藤綱であるが、これとて史實の傳はつて居るものはないが、そこは文士の筆である『棠陰秘事』の種に青砥を混ぜた趣向が出来たのは、馬琴の『青砥藤綱摸稜案』である。

寛永に出た『鎌倉比事』<sup>ケンソウヒジ</sup>は北條泰時を主人公としてあるが、矢張り右の亞流であらう、元祿の西鶴の『本朝藤陰比事』は名を『棠陰比事』に似せた丈で、事件は別事件である。この頃となつては何陰秘（比）事といふ名は探偵小説といふ風に頭に響き來るのである。寛永の『桃陰比事』後に『本朝藤陰比事』と改まつたのもみなこの流義である。

青砥があまり古臭くて、そう／＼種も無いから次に出たのは好評ある板倉父子の物語である。西鶴はそこを狙つたのであるが、その後になつて大岡越前守が評判が良くなると、板倉に假託し、若くは板倉大岡を併稱した探偵小説が出来る。

『板岡實錄』『大岡板倉二君政要錄』などの出來たのが、それであるが、大岡に評判が立つと、前の板倉の影が薄くなり、内容も追々充實して、こゝに大岡物が幅を利かすやうになり、名奉行といへば大岡越前守、裁判物といへば大岡政談と獨占したのである。（法窓秘聞）

この考証家が、もちろん、大岡政談に混入しているソロモン裁判の話に目を掩うている筈がない。

「大岡裁判の話も沢山ありますが、色々な裁判も交っています。創作もあれば、支那の話も大部分ある。もう一つ面白いのは西洋に発達致しましたソロモン時代の噺もある。二人の母親が、子供をどっちか自分の子であるか争つた際に、大岡越前守が両方の女に、子供の手を両方から引つ張らせ、子供は痛いといった時に、子を離した方が本當の母親だという裁判が、大岡十八政談の中にあります」

じつは、この高名の司法官は、以上に付け加え、そのソロモン伝説が如何なる経路で日本に入ってきたかに対し、臆説をいささか詳しくしたこと、従来の漠然たる一般世説に一步をすすめている。

「これはヨーロッパに発達した有名なソロモン傳説がアラビヤからベルシャを経て支那に入ってきた。之が支那を経由して日本に入り、キリシタンと共に入って來たものが、大岡裁判の中に混入致しているのです（同上）」

他の解説者が、切支丹の宣教師直輸入のように考えている説を、これはアラビヤ、ベルシャ、支那と經由させている点が、特に注目しなければならぬ異見である。

ここで忘れてはならないのは、ソロモン裁判と大岡政談と、同一話源に相違ないが、話の筋は若干ちがって來ていることである。ソロモン王は、劍をもち來れ、子供を真二つに斬るという。気短かな、荒々しい、惨酷を意とせぬアラブ風がうかがえる。熱帶的な、砂漠民族の特長の現われとも見られる。これに反し大岡政談は、娘の手を二人の母親をして左右から引っぱらせるというので、ことやおとなしくて、温帯住民的である。この変化は、アラブと日本の風土の差が生ぜしめたのか。それともアラビヤ、ベルシャ、支那と伝來の途中で、変形したのか。――まことに單純の話のようでも、考えてみなければならぬ陰影は、きわめて多いことがわかる。

## 五 耶蘇会の報告

大岡裁判の母子紛争の話が、切支丹から伝えられたものと、研究家は云つても、漠然たる推量で、確証があつての事でない。しかるに前半（昭和二四年）が、フランススコ・ザヴィエル來朝の四百年にあたり、記念の行事、出版いろいろあつ

た中に、この点を解くべき有力な鍵が村上直二郎博士から提供せられた。

「わが国でもコンパニヤ（耶穌会）の布教が進むにつれ、宣教師が信徒に教えて演劇をさせたことが、その書翰に見える。一、二の例をあげれば、永祿三年（一五六〇）降誕祭には、豊後府内の教会で、アダムとエバが蛇にまどわれ、禁断の木の実を食って、エデンの園より追ひ出された後、天使が現れて罪をあがもう希望を與えた話。一・人・の・赤・兒・を・各自・の子・と・云・い・は・つ・て・い・た・二・人・の・母・に・對・する・ソ・ロ・モ・ン・裁判の話。天使が耶穌の生誕を牧者たちに知らせた話などを演出して、觀衆を感激させた」（村上直次郎著「日本とポルトガル」）

これが百年、百五十年と経るうちに、日本化され大岡裁判に転生すべき可能性あることは、何人にも容易に首肯されることである。

しかしその降誕祭の宗教劇において演ぜられたソロモン裁判が原話どおり、王が劍を以て生児を両断すると云う荒々しいものであったか、それとも既に日本化されて、二人の母が娘の手を左右から引っぱりこするように温和化されて上演されたかは、疑問の存する所である。これは原典なる耶穌会の報告書に當って見なければならぬ。

これは既に知られている如く、原文は「日本支那両国を旅行せるイエズス会のバードレ及びイルマン等がインド及びヨーロッパの同会會員に贈りたる一五四九年より一五八〇年に至る書翰」（*Cartas que os Padres e Irmãos Companheira d' Jesus, pue andão nos Reynos de Iapão & China escreuerão aas da mesma Companhia da India & Europa, desde anno de 1549 até o de 1580. Em Europa, par Manoel de Lyra Anno M.D. XC VIII*）と一五九八年（慶長三年）ポルトガルの町エヴォラのマヌエル・デ・リラの出版に係る。つとに村上直二郎博士の訳があり、今ではイエズス会士「日本通信」上下二巻、「イエズス会日本年報」上下二巻として、『新異国叢書』に収まっているのが入手し易い。

前記のソロモン裁判に関する記事は「日本通信」上の、書翰三二の「一五六一一年（永祿四年八月二十九日）十月八日付、イルマン、ジョアン・フェルナンデスが豊後より耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰」という長文（日本訳で二十頁）の中に左の如く見える。

「去る降誕祭（永祿三年十二月九日）の約二十日前、バードレは二、三人のキリシタンに對し、降誕祭の夜諸人、主において樂しむため演劇を催さん事を勧め、何をなすべきかを定めず彼等に一任せり。降誕祭の夜となりて、彼等は聖書につきて聴きたることを題として、種々の劇を演じたり。最初にはアダムの墮落と贖罪の希望とを演じ、会堂の中央に林檎の木を置き、これに鍍金の林檎數箇をつけ、ルシフェルはその樹の下にてエバを欺きたり。このことは日本語の歌をもつてせしが、喜の日なりしにかかわらず、大人も小兒も泣かざる者なかりき。墮落について彼等が天使よりバライソ（エデンの園）より追はれし時更に大なる涕泣あり。劇の題と出演人物立派なりしとのため泣かざる者なかりき。その後暫くしてアダムとエバはデウスが彼等に與へ給ひし服をきて出場し、つぎに天使一人現れて贖の希望を與へて彼等を慰めたれば、彼等は喜と少なからざる涙とをもつて歌ひながら退場し、觀客は喜びたり。その次ぎにソロモンに裁判を願ひし二人の婦人を演出せり。この劇は母が子に對して有する自然の愛の力、その他聖書に記したる多くのことを演じ、子を殺す當国の異教徒の婦人等を赤面せしむるに、よきものなりき。つぎに天使が牧者の前に現はれて喜の報を傳へ、行きて幼兒ゼズスを拜すべしと教へたり。また生きたる者および死したる者を裁判するため、栄光の中にゼズスの来るところを演出せしが、この間一人聖歌を歌ひ、キリシタン等これに合唱せり。主の御庇護により、右は悉く甚だ巧妙に行はれたれば、最も愛する兄弟等はその地において聞くよりは、當地に在りて見たらば更に喜ぶべきほどなりき。夜半にいたりて諸人例のごとき熱心をもつてミサを聴き、また聖體を受くるため、告白をなしたる者多數ありしが、バ

ードレは同夜の御祭り騒ぎによりて心の平静を失ひたる者あるべきが故に割礼の祝日（訳註一五六一年一月一日、すなはち永禄三年十二月十六日）まで待つべしと言ひ、明日にいたりて多数のキリシタン聖体を受けたり」

この記事には「その他聖書に記したる多くの事を演じ」とあるから、日本化されずに剣をもって両断しようとした場面が演ぜられたと思われ、なお「子を殺す当国の異教徒の婦人等を赤面せしむるによきものなりき」とあるのは、日本に生活難から口数をへらすため墮胎の風習のあるのを云ったのであらうが、この言及も又、嬰兒両断の場面が演ぜられたことを推想させる。

彼等の通信をみると、降誕祭にはいろいろの行事があり、宗教劇もしばしば演ぜられている。但し、はっきりソロモン裁判と明記して、その内容まで書いたのは、この書翰ひとつである。それにエデン追放の所演をみて「劇の題と出演人物立派なりしとのために泣かざる者なかりき」という程の感銘を与えたのだとすれば、この降誕祭の夜のミステリー劇からソロモン裁判の話は、しだいに日本にひろまって東漸し、ついに適當の日本化を受けて、大岡裁判に合流したのではないかと、最も多くの人の付け易い想像であらう。

ところが、ここに、その安易な想像に、根本的疑惑を抱かしめないではおかぬ材料が見出される。それは「ソロモン王の裁判考證」という一篇が、長谷川天溪の筆により、早く明治三十一年六月廿日および七月二十日発行の雑誌「太陽」に、二回にわたって分載せられているのである。

## 六 チベツト伝説

それはチベツトに「鼻奢伝物語」というのがある。コリアという王様の宰相ムルガドハーテの第七男である。宰相は波羅門僧侶に命じて、ひろく国内に花嫁をさがし歩かせたが、或る日カムバという所で、好ましい乙女に出会った。美しいばかりでなく、賢明で且つ貞淑である。五六人の仲間は水浴するのに、見えもかまわず、ただちに全裸体となって水流にとびこんだが、この乙女（彼女をヴィサクバーという）は、水の深さに従うて下から上へと衣類をぬぎすて、ついに肌を見せないのに、使者はひどく感心して、後で木影に呼んでいろいろな事を問答してみるのに、まことに聡明無比だから、帰って報告して、宰相の七男の花嫁に迎えた。

「かくて月日のたつ程に、彼女の智慧はいよいよ輝きて、聞くもの皆賞賛せざるは無かりき。なかに取り出でて囃しつるは、彼女が一人の赤児をあらそう二婦人の訴訟の起りつる時、王も宰相も、いずれが非とも定め難く、痛くぞ困うじ果てけるが、彼女は事もなげに告げ知らせき。『両婦人に告げ給え。我等は、この嬰兒の生みの母は兩人のうち、いずれなるを知り難ければ、この兩人のうち、力すぐれたる者の奪うにまかせんと。かくて兩人嬰兒の腕をとりて、たがい争うその内に、嬰兒は苦痛に堪えず泣きたつるならん。この時産みの母たる者は、不憫さに手を離し、生あらば再会の機もあるべしと諦めなん。又さなき者はあくまでも腕力もて奪いなんとせんずらん。その折こそは判決すべき時なれ。さらば産みの母ならぬ者は事の仔細を白状せん』果してその如し」

すなわち物語の中心になって、聞く者の賞讃を浴びるのが、ここではこの賢明の女性であってソロモンや、大岡江戸奉行のように男ではない。

しかも長谷川天溪は、大岡裁判については、全く言及しておらぬ。早耳の雑誌記者の見聞に入っておらぬところを見ると、この頃は日本ではまだ、この大岡政談の母子争いの原話が広く問題になっていなかったことを証する。然るにソロモン裁判は、こうして一般雑誌の記事になる位だから、キリスト教信徒以外にも、相当の広がりを見せて知られていたと云えよう。そして天溪は、このチベット古伝説をソロモン裁判と比較し、「吾人はこれによってソロモン裁判の物語は、その本源を東洋に発したるを十分に是認し得」と断定し、それを裏づけるため、聖書物語は不完全だと云って、チベットの鼻奢伝物語から、さらに補説するところがある。

座みの母ならぬ女が、あくまでも嬰兒を欲して、無残にもこれを斬り割くのも意とせぬ動機は何であるか。聖書はそれについて説かない。しかしチベット古伝説に於ては、その一点が極めて明白である。すなわちA女は某なる者の正妻で、B女は妾である。しかし正妻には児がうまれぬので、妾の出産をひどく羨んでいた。妾はその心をさとって、自分の産んだ児を本妻に与えて、その児としたのである。

そのうちに主人が死んで、財産相続となったが、その国の法では、遺産はすべて、児の生母が受ける規定になっている。そこで妾はその児を取り返そうと謀らみ、正妻は子を殺したら、財産は自分のものになると考え、さてこそ法廷で、無慈悲にも嬰兒の手をきびしく引っぱりあった――

「ソロモン物語にはこの動機を説かず、これぞその本源を東洋に借り、その動因は既知の者の如く見なして云い傳えたる證據なる」(長谷川天溪「ソロモン王裁判の考證」)

天溪は更に問題をひろげ

「佛教の中にも又右と同一なる傳説あり、茲にてはその裁判者は大覺佛陀その人にして、物語の因縁はすこぶる明瞭に



して、決してソロモン判決におけるが如くにあらず。これ又ソロモン裁判の物語が、その源を東洋に發したるものというべし」

と、類似の物語が仏典にもあることに言及し、更に問題をもどして、

「かく事實上、關係ありとせば、ここに起るべき問題は兩者の中、いずれが一方の本源なるやに在り。書籍の年代によつてこれを證明せんか。蓋し不可なり。何となれば書籍の物せらるる以前にあたり、すでにその物語は傳えられたればなり。書籍は單にその云い傳えを記録したるまでなれば、その出來あがり年代の前後を以て、その傳説その物の前後を定むるは、甚しき謬りなるべし。その眞性質を瞭然たらしむる外、他に選ぶべきの道なかるべし。これは先きに試みたるソロモンの裁判物語に於て一例を知るべし。斯くしつつ兩者の物語を比較研鑽しなば、その物語の本源も明瞭となり、ひいては思想の歴史を究むるの便利も出で來ぬべしと信ず。而して予はソロモン裁判の嬰兒裁判の一つは、その本源をチベットに發したる者なりと斷ずるに憚らず」と勇敢明快に云い切っている。

ソロモン、チベットの兩伝説が、同根に出でていることは、吾等もこれを諒とする。しかしその新古、つまりどちらが元で、どちらが受け継ぎであるかは、天溪の提示した材料のみでは、軽々しく判斷できない。第一、天溪はこのチベット物語は何という本によつて紹介したのかも、手がかりだに与えておらぬので、吾等後進はこれ以上の研究の進めようがない。しかしひそかに思えらく、物語や伝説は、所をかね、話者をかね、時代をふるに從つて、しだいに疎より精に、簡より繁に、粗朴より技巧的になつてゆく傾向がある。(もつとも凡てがこうとは速断できず、たとえば坪内逍遙が考証したオデッシイと百合若伝説の如く、ギリシヤから日本にきて、ひどく簡略化せられた例もある。しかしそれは原作が稀有の

長篇、絶代の傑作なるため、伝承者の手腕が及ばなかったので、むしろ例の少いことではあるまいか。

いまソロモン伝説と、鼻奢伝物語を比較すると、前者がはるかに古朴で、簡明で、力強く自然であるのに反し、後者は詳しいだけ、それだけ、話の辻褄を合せた痕が、歴々として掩えず、少くとも天溪の提供した材料で判する限りは、私には彼と真反対の結論しか出ず、つまりチベット伝説の方が後から出来たに違いないという結論がでてくるのである。

## 七 更に 一 変 形

しかし天溪の紹介に反対したからといって、彼のこの考証の価値は、寸毫も減少することはない。それは大岡裁判の依つて来る原拠を根本的に考察し直さなくてはならぬ暗示を提供するからである。

大岡政談の母子あらそいは、内田暮庵翁、尾佐竹猛博士、どちらも天下の博識によってソロモン裁判の譏人と折紙がつけられ、最近の「定本講談名作全集」別巻の解説（佐野孝）でも「切支丹の傳道師によつてもたらされた西欧の（ソロモンのこと）賢者の焼き直しもある」と云つていて、これを疑つたものはない。

しかし既説の如く、ソロモンで嬰兒を剣で両断するという荒々しいのが、大岡政談で、二人の母親が娘の手を引っぱりつゝすることになっているのは、注目せねばならぬ変化である。

これは温和な日本人の嗜好に叶うように作り変えられたものと考えられ勝ちであり、事実そう推測せられていたと思うが、しかし、もしここに、二人の母が一人の娘の手を引っぱつたという話の先例があるとすれば、大岡政談はそれに原拠していると考えねばならぬのが至当である。

長谷川天溪が「ソロモン裁判の考証」として紹介しているチベットの古譚「鼻奢伝物語」は、ずばり、それに該当するではないか。

ただその発表が明治三十一年の古い雑誌で、そのころはソロモン裁判と大岡政談の類似も、或いは識者の中には気づいていた人もあったか知らぬが、一般には話題にならず、したがって折角の天溪のこの考証が、二つの裁判物語のあいだに割りこんでくる余地もなかった。しかし、この明々白々な材料が浮び出てくると、これを問題にせぬわけにゆかぬ。チベット古伝説の鼻奢伝物語が大岡政談に混入したとして、それは一たい、いつ頃の時代に入ってきたのか、踪跡もわからず、想像もおよばない。あるいは天溪のいう如く、釈尊伝説にも類似の裁判話があるとすれば、むしろその方が日本に入ってきて、説教として僧侶の口から一般民衆に浸潤していたのではあるまいか。

そうは云いながら、じつは私はやっぱり、これはソロモン伝説の影響だという従来の説を全くはすてきれぬ。それに愛着があり、執心がのこる。

なぜなら、豊後の府内（いまの大分）で、（永禄三年）一五六〇年織田信長が今川義元を桶狭間に破った年のクリスマスに、ソロモン裁判の宗教劇が演ぜられたことは、明白な文献が残っていて、これは一点の疑いを容れる余地もない。母子あらそいの大岡政談が形をなしたのが、いつごろの事か確実なことの分る筈がないが、そもそも大岡政談なる講釈が初めて現れたのは、大岡越前守の没後まもない宝暦年間（一七五——一七六）だという。その間二百年前後の間隔があるが、これはソロモン裁判を、大岡政談に変形させるのに、ちょうど適当な時期ではなかったかと考えられる。

嬰兒を剣で両断する趣好が、娘の手の引っぱり合いに、温和化し、変形したのは、無名の天才の創造の一片が加わったというより、古く民間に浸潤して、いつか埋没し、消滅していた物語が、ソロモン伝説と接触して、ふたたび息を吹き返

したというようなことはあるまいか。それは大胆な空想だが、どうも私は、大岡政談ソロモン裁判関係説はすてかね、それにチベット物語か、釈尊伝説が久しい前に日本に入っていたのが、ここで思出の中に甦って混入したのだという自分の仮説に執着する。

なお大岡政談には、雞のもち主をきめる話もある。二人の女が一羽の牝雞を奉行所にもちこんで、互に自分のだと云いはって引かず、どちらの物とも判断がつかない。

思案の末に、大岡越前は、「よし、それなら二人で、とうとうと呼んでみよ。雞がついて行った方がその飼い主だ」と云って、機智で結着をつけた話である。これもソロモン裁判あるいはもつと溯ってチベット古譚か、釈尊伝説の変形であること、疑いを容れない。

#### 八 戦後版大岡政談へ

大岡越前の話は、早くから日本にきた外人たちの興味をひき、いろいろな書物にその記事が見える。グリフィス (William Elliot Griffis) が明治文化開発の最大恩人のひとりであるのは今更いうまでもないが、明治三年にきて、その見聞を詳細に報告した「ミカドの帝国」(The Mikado's Empire, 1876) は早く日本を海外に紹介し、今日も価値の少しも褪せぬ名著の一つである。その中に“Folk-lore and Fireside Stories”の部門があつて大岡越前を“Solomon of Japan”として紹介し、その裁判の二三を語っているが、その中に、母娘あらそいの話もふくまれている。ただし特にそれがソロモン裁判に似ているとは言及していない。

その次ぎにこれを紹介したのは、やはり日本史の研究家および著者として聞えたデニングの「古き日の日本」(Walter

Denning, Japan in Days of Yore, 1883) の第一巻に、大岡政談一篇が収められている。それ以後、日本の事をかいた多くの本に、紹介せられていると思う。歴史としてはマードックの三巻なる大著「日本史」(James Murdock, A History of Japan (1926)) に一町奉行が多くの天皇にも勝って全頁の記述を与えられている。この書は夏目漱石の小品「マードック先生」で夙に知られ、山県五十雄の助力を得て名文でも聞えており、外人著作の日本史としては最も浩瀚なもので、日本に來朝した外人が日本研究には、必読の書としてゐる。その他、大岡の記述は多くの外国語史書に散見するが、それらはここに言及を避ける。日本人にはよく知れきった同一のことの繰り返しになるのを恐れるからである。

只、結論として、どうしても見のがすことの出来ないのは、L・G エドモンジの「キモノのソロモン、大岡物語」(Olatam more tales of Solomon in Kimono, 1957) である。これは多分、大岡について外人の語った最後の書であろう。日本で出版され、アメリカ占領軍の機関新聞であった「太平洋星條旗」(Pacific Stars and Stripes) の版權所有になっている。それは人も知る通り、専門の記者は少く、駐兵の中の筆の立つのが記事をかいたので、幼稚無難ではあったが、外人が眼前の日本を、どう見ているかが古今にわたって窺えて、興味があり、姿を消すまで久しく日本人にも親しまれ、永く記憶にも留まるだろう。この書の中には二十の小話が収めてあり、巻末にはそれら語りもひめられた講談でなく、正伝(The Real Ooka) が添えられている。

さてその第三話に「馬を分配する話」(Halved Horse) という一篇が載っている。私は知らなかった話だが、聞いてみると、まことに歴史を無視することも甚しい荒唐無稽の筋ながら如何にも大岡政談らしいところもある。

町奉行の交替期がきて、前任者の京都からきていた九条(こんな事はあり得ない)は、水戸と薩摩の係争を、難問題だから、後任の大岡にゆだね、自分の業績を傷つけまいとした。

それは水戸、薩摩両家で、馬の合同飼育場を設けたが、今度都合によって解散する。ところがそこで育てた馬は全部で十三頭で公平に分配することがむづかしい。半端の一頭を換算して、片方が金銭で受取れば問題ないが、武家に取って軍馬の尊さは金銭以上だから、どちらも互いに譲らぬ。九条が「難問が残って気の毒だ」と申しわけ的に云いわけすると大岡は、「なあに、公平に真二つに割ればいいのだ」といとも簡単にいう。

ところが、当時、軍馬の殺戮は禁じられているのだから、狡猾な九条は、まことに真二つに割れるなら、私の馬一頭を賭けようという。

「私は賭けごととは好きではないが、この場合は、後へはひかせぬ」

「二つに分けてみんなが納得しますか」

「少くとも當の水戸、薩摩両家は満足なさる。私も満足する」

さて法庭を開いたが、水戸も薩摩も、金銭での調停案にはきつく反対して、飽くまで現物の馬でもらいたいと云い張る。

「では、両方にあたりさわりのない処置としては、その端数の馬一頭は將軍家に献上なさっては如何か」

將軍家に向って反対できぬから、双方、不承無承に押し込まると、大岡は

「しかし御両家に犠牲を強いるのは、裁判と云い難い」

と云って、自分の馬一頭を法廷にひかせて、十三頭の中に加え、

「さあ、これで両家公平に、二つ割にして七頭ずつお分けなさい」

という。九条は驚いて、裁判官は審理の公平を保つために、物品の受授は禁止されていると注意し、水戸、薩摩の両大名も、奉行に損をかけてはならぬと辞退すると、大岡は、いや、私の馬は一頭もへりはしませぬと云って、九条が賭ける

といった馬の口をひいて、自分の厩舎につれこませたと、云うのだ。

だいたい、御三家の水戸と、幕府の目の上の瘤の薩摩と共同事業で、馬の飼育場をつくるというのも、町奉行が両大名を法廷でさばくというのも、あまりな出たらめで、ほんとうにこれに似た話のタネがあったのかどうか元より疑わしい。

ただ馬を公平に二つに分割するというアイデアが、外人記者にソロモン裁判を連想させたものと見え“The Halfed Horse is a variation of the Solomon legend”（馬を半分づつに分ける話はソロモン伝説の作りかえである）と云ってゐる。

この馬の分け合いの話はソロモン伝説の日本化としても、最も繁雑で拙劣なものだが、しかしこうして同一原話から、幾つかの分話が生じたというのを見ても、これが如何に中外の嗜好に適した構造をもっているかがわかる。

ひとり我が国ばかりでなく、釈尊伝説、チベット古譚を中心にして、西洋ではソロモン伝説として、教会での法話はもちろん、小学読本にも採用され、極東では大岡裁判として高座は元より、テレビジョンでも最も人気ある出し物として、くり返される。人類至深の要求——正義を尚び、不義をにくみ、機智を愛し、明断をよろこぶ心を満足させるものが、この類型の物語の中に幾分か潜むことは争えない。

〔付記〕この篇は比較文学の一部として講じたものに、その後発見の新材料をもって、増補した。したがってすでに受講した者にも若干の新興味があろう。